

「みんなが集まる『安らぎ広場』！ささえあいをもっと地域に広げる事業」

雲南市 鍋山交流センター

## 1 鍋山地区の概要

- (1) 人口 1,324 人
  - 高齢化率 41.5%
  - 世帯数 405 戸
  - 自治会数 28 自治会

### (2) 鍋山地区の概要

鍋山地区は雲南市の中西部に位置する農村地帯である。地区内には国道 54 号線が通っているが、地区内の標高差は大きく、山間地や傾斜地に住宅が点在している集落もある。

地区内に幼稚園及び小学校はあるが、児童数は平成 15 年の 104 名から令和元年は 53 名と減少傾向にある。地区内に病院はなく、3 店舗あった個人商店は 1 店舗のみが残っている。そのため、通院や買い物は自家用車及びデマンド型乗合タクシーを利用している。

近年独居・日中独居高齢者の増加、交通弱者、買い物弱者が課題として顕在化してきているが、地域自主組織「躍動と安らぎの里づくり鍋山」（以下、「躍動鍋山」という。）が中心となって、その解決を図るために多様な課題に対して分野を横断して地区住民を巻き込んだ活動を行ってきた。

躍動鍋山は、市から水道検診を委託しての高齢者の見守り活動や安心生活応援隊による除雪や草刈りをはじめとした生活支援、地区の看護師有志によるボランティアチーム「ちょんてご」を中心に、専門性の高い地域人材を活かすことで、課題に対応する「ちょんてごカフェ」などを交流センターや安らぎ広場にて行うなど、地域福祉を中心とした地域づくりを展開している。



(鍋山交流センター)

## 2 事業の主旨

当地区では、高齢化の進行もあり安らぎ広場や交流センターまでの交通手段がなく参加できない方が多数あり、集いの場への男性の参加が依然として少ないという課題もある。

本事業は、これらの課題解決のための仕組みづくりを、住民が主体となって行うことを通じて、事業の必要性を確認し、対策を講じ、住民への理解を広げていくことで、これまで実施してきた事業の効果を高め、担い手の育成にもつなげることで、今後も事業を継続していくために必要な機能を備わった拠点の実現とそれを活かせる人材の育成をねらいとする。

## 3 具体的な取組内容

### (1) 地区内交通システムの試行

(福祉有償運送事業実施を検討中)

- ア 地区住民に対してアンケートの実施
- イ 自治会サロンにて地区住民へのヒアリング・事業趣旨説明と広報
- ウ ちょんてごカフェでの試行運送

### (2) 安らぎ広場での得意ごと発揮の場づくり

- ア ちょんてごカフェ男道場の開催

### (3) 事業推進体制整備

- ア 外部人材の導入：宮崎大学生の雇用
- イ 先進地視察

## 4 評価と成果

### (1) 地区内移動の仕組みづくりに向けた試行運送とニーズ調査

仕組みづくりを始めるにあたって、まずはターゲットを明確にするために住民の集まるイベント等でアンケート調査を実施した。地区内の60代以上を中心に97名に調査したところ、住民の4割が躍動鍋山による地区内移動の利用を希望していることが分かった。

そのことをふまえ、ちょんてごカフェで躍動鍋山の活動車3台活用しての試験運行を11月から実施した。成果として、ちょんてごカフェの参加者増、特に新規参加者が毎月出てくるようになり、住民同士の新たな関係性が生まれた。実績として送迎サービス実施以前は平均18名であったのに対して、実施後平均22名と22%増加している。

また、具体的にニーズを細分化するために各自治会で開催されるサロンに出向き、ヒアリング・事業趣旨説明や広報を実施した。



(ちょんてごカフェ送迎の活動状況)

### (2) ちょんてごカフェ男道場の開催

「安らぎ広場での得意ごと発揮の場づくり」を推進するにあたって、まず

は地区内の男性が集まるきっかけづくりとして、「ちょんてごカフェ男道場」を開催した。成果として、男性の集まるきっかけの1つとなったこと、そこに集まる男性たちの関係性構築ができた。具体的内容として健康チェックや健康に関する講座など、普段外に出る機会の少ない男性にとって有意義な時間となった。

また、この日も送迎をすることで安心して参加できるイベントになった。



(ちょんてごカフェ男道場の活動状況)

## 5 今後の課題と見通し

地区住民の移動を躍動鍋山で支えていくことで地区内イベントの質や住民同士の交流が活発になることが分かったが、これを持続可能にしていくためには、主体的に活動していく人材、事業を継続していく財源の確保が必要になってくる。また、地区内にあるニーズはある程度拾っていくことはできているものの、仕組みづくりには「どこに・どれくらい」あるのかというところまでアプローチしていく必要がある。

来年度以降も、サロン等で声を拾いながら、より充実した地区内移動の仕組みになるように、住民と協力しながら活動していく。

(文責：集落支援員 佐藤圭悟)